

---

# Holonic Concerto

神城水都

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

H o l o n i c   C o n c e r t o

### 【Nコード】

N 4 4 2 0 A

### 【作者名】

神城水都

### 【あらすじ】

歪んだ空間を修復する事を生業とする修復士。そして、その名家に生まれたセレとカイトの姉弟。二人は今日も各地で空間を修復する、駆け出し修復士。しかしこの二人には、誰にも言えない秘密があった……。

## 序章

人間は人間界に。

悪魔は魔界に。

それは、子供でも知っているこの世界の理。

でも、時々その理は破れる。例えば相手を意図的に呼んだ時。それは、正当な手続きを踏めば咎められない。

そして、呼ばれていないのに向こうの世界へ行った時。その時は、『咎』として、それなりの対価を支払わねばならない。

しかし、それを防ぐ方法があるのも、また事実。その方法とは……。

## 第一章：セレとカイトと……

どこまでも平らな緑色の絨毯。否、大草原が広がる平地。空の蒼と、緑の境界線に、二本の線が続いていた。それは、線路だった。

その時、線路の上に乗っていった小石が、ポトン、と落ちる。レールの振動が大きくなり、周りの空間が揺れた。

先程から続いていた、ガタン、ゴトンという音は、次第に大きくなり、ゴー、という音に変わる。

直後に、汽車が通過した。

今、通り過ぎた汽車内部のあるコンパーメント。そこには、二人の子供が乗っていた。

「なあ、後どれ位で着くと思う？」

退屈していたのだろう。子供の内の片方、少年の方が同乗者に問い掛ける。その声は、声変わりしたてだった。

「うーん、二時間つてところじゃない？」

いくらか高い声が答えた。少女の方だった。

「うえ、まだそんなに？来るんじゃないかな。全く」

少年が、自分の黒髪をかきむしりながら言う。それを見て、少女が眉をひそめる。

「おい、カイト。そんな事言うな。あつちはあれでも、死活問題なんだぞ」

新たに、三人目の声がした。しかし、その姿は確認出来ない。そんな事お構いなしに、カイトと呼ばれた少年は牙をむく。

「フェルクには言つてねえ！勝手に口出しすんな、悪魔！」

端から見れば、少年が少女に怒鳴っているように見えるだろう。「ムッ。何度言ったら分かるんだ。俺は悪魔ではない。魔族だ」

しかし、発せられたその声は、まるで少女のものではない。落ち

着いた低めの声。

「なあセレ。こんのバカフェルク、どう見たって悪魔だよなあ」

カイトは、視線を少し上げて、セレと呼んだ少女の方を向きやった。

その目は、

「肯定して」

と語っていたが、

「カイト、喧嘩しないでよ。まあ、何で仲良く出来ないの？」

セレという少女は、こう返した。

途端にカイトは不機嫌になる。

「何だよ。セレはいつもフェルクの肩持つじゃん。セレは実の弟より、悪魔の方がいいってわけ？」

「悪魔じゃない」

すかさず入るフェルクの訂正。

「二人とも、仲良くしてよ。特にカイト」

セレは、溜め息混じりに言う。

「それに、今から仕事だし。支障が出て知らないから」

仕事。その言葉に、カイトは押し黙った。

それもその筈。なぜならそれこそが、二人＋ がここにいる理由だから。こうやって、何時間も汽車に揺られているのも、全て仕事のせいに他ならない。

「あー、何で修復士の人口って少ないんだよ。だからこんなに遠くまで行かないといけないじゃないか」

修復士。それは、二人の職業であり、身分でもある。

この人間界は、魔界と接している。

普段二つの空間は閉ざされている。しかし空間の境目というのは、まるで布みたいに、整えても整えても必ず歪みが生じるのだ。

歪みはいつか壊れ、そこからは、招かれざるモノ

『咎』が侵入

する。

『咎』とは、呼ばれていないのに、人間界へやって来た悪魔の事。その悪魔達は、魔力が本来の半分しかない。そして時間が経つと、理性を失い、『咎』となり果てる。

『咎』は人間を襲う。人間にしかない『靈幹』を得るために。

そこで、登場するのが修復士。彼らは、歪み、壊れた空間を修復する。

その能力は、誰もが持っているのではない。魔法とは、また別の能力だった。

セレとカイトは、数少ない修復士の名家・ルグレ家の生まれだった。

セレは今年で十五歳。青みを帯びた長い黒髪に、血のように紅い瞳を持つ。

ちなみに、紅い瞳の事は、龍眼と呼ぶ。それは、今は絶滅した龍に由来する。龍の瞳も紅かったらしい。

龍眼は、僅かな魔力でも察知する事が出来る。だからこそ重宝されている。

カイトは十四歳。セレより黒いボサボサの髪に、金色の瞳を持つ。カイトは、末っ子でありながら、ルグレ家の次期当主となる事が決まっていた。それはひとえに、潜在魔力が大きいからである。

ルグレ家というのは、潜在魔力の大きな家系である。セレの魔力も人並みより大きかった。

しかし、カイトの魔力は、セレさえも遥かに凌駕している。その大きさは、悪魔並みである。

「そうだよね。何で修復士って少ないんだろ。フェルクは分かる？」セレが、膝の上の乗った何かを撫でながら言った。

そこにフェルクはいた。常人には見えないであろう銀の毛並み。しかし、セレとカイトの目には、はっきりと映し出されている。

「さあな。でも俺達魔族には、空間を操れるヤツはいない。」

そう、フェルクは、人間界では一般的に（本人は否定しているが）悪魔と呼ばれている、魔界の住人だった。

今は、他人に見られないよう、体長五十センチ程の妙な生き物の姿に身をやつしている。しかし、その金色の瞳は、紛れもない悪魔の証拠だ。

「ふーん。フェルク、分らないのか」

カイトが言った。その顔は、少し嬉しそうだった。フェルクは反論する。

「当たり前だ。俺だって只の魔族だ。知らない事の二つや三つだってあるさ」

「一つ二つねえ」

また始まりそうな言い争い。セレは、傍観する事を決めた。今度は、楽しそうに聞いている。

「何が言いたい」

「言ってもいいのお。ほら、この前のアレ……」

「そ、ソレは言うな！」

「ソレって？」

「あ、セレ。あのなあ」

「おいっ！」

セレとカイトとフェルク。この三人は、いつも一緒だった。それは、五年前のあの時から……。

## 第一章：セレとカイトと……（後書き）

初めまして。神城です。

さて、初の連載です。難しいですね。どこまで書けばいいか迷いました。でも、小説を書く事って楽しいです。

ちなみに、Concertoは、「コンサート」ではなく「コンチエルト」とお読み下さい。

まだまだ未熟ですが、今後ともよろしく願います。



## 第二章：初めての都会

プシュー、ガッコン。

またしても大量の煙を吐き出しながら、汽車が停止した。ドアが開き、人々が下車していく。

その人の群れの中に、セレとカイトと＋ はいた。

「ふう、やっと着いた」

プラットホームに足を着けたカイトが、ペキペキと体の筋を伸ばしながら言った。

「流石に汽車で五時間っていうのはキツイね」

続いて降りたセレが、ウーーンと背伸びをしながら言った。

「そうか？そんなに長かったか？」

セレの肩に乗ったフェルクが、ケロツとした表情で言った。

その言葉に姉弟は、明らかな非難の表情を浮かべてフェルクを見つめる。

「うわ、あれだけ長時間だったのに、退屈じゃないなんて」

「流石長生きだね。二五〇歳」

「人間だったらお年寄りだぞ」

よほど退屈だったのか、いつもは諫め役のセレまで文句を言うてくる。その口調には、恨みがたつぷり込められていた。

「待て。俺は魔族の中では若いほうだ。……っていうかお前ら、声を落とせ。周りの人が不審がっているぞ」

気づかなかつたらしい。あつ、と声を上げながら、二人は互いに顔を見渡した。

周りの人にはフェルクが見えていない。何も無い空間に話し掛ける二人は、はつきり言って不審者だった。

「全く。気を付ける。俺がいる事、バレたらヤバいんじゃないか？」

「それはフェルクがいけないんだろ。フェルクが何も言わなかった

らバレない」

カイトは豪語した。

「よし、フェルク。オレ今からお前をシカトする！話し掛けても無駄だかな」

悪戯を思い付いた子供のように顔を輝かせるカイト。

フェルクも、何かを思い付いたらしく、ニヤリと笑う。

「じゃあ、俺が何を言っても気にするなよ」

「あつたりまつ……って、今は無し！ノーカウントだぞ」  
つつい回答してしまったカイト。

セレは、

「違うトコでやってよ」

と、小さく呟く。その言葉が二人に届く事はなかった。

一方カイトは、スタスタと早足で歩き出す。フェルクは、早速からかっていた。

「おい、カイト」

「……」

無言。

「こつちを見る」

「……」

無言。少し顔を背けた。

「諦める。お前はとうせ負ける」

「……」

無言。こめかみがピクピク動く。

「前から思っていたんだが、お前バカだろ」

「……」

無言。握り締めた拳が、わなわなと震える。

セレは、弟の我慢強さに、感度さえ覚え始めてきた。

フェルクは、更に畳み掛ける。非情にも、小さくボソツと呟いた。  
「……インヒニカイト……」  
「……！」

とうとう爆発。カイトは般若の如く顔を歪ませ、大きな声で吼えた。  
「こんのバカフェルクう！その名前だけは呼ぶなー！」  
辺りに行く人が、その声にギョツと振り向く。勝負は、フェルクが勝った。

「カイト！それにフェルクも！」

セレが叱る。不審な行動は、控えた方がいいからだ。

「だって、フェルクの野郎。あの、ダサくて変で付けた人とそんな名前の人の品性が疑われるような名前で呼びやがった！」

カイトは、怒りに震えながら言った。

インヒニカイト。カイトに言わせれば、ダサくて変で付けた人とそんな名前の人の品性が疑われるようなその名前は、彼の本名であり、そして禁句である。

セレは何回目かの、大きな溜め息を吐く。こんなにしょっちゅう吐いてたんじゃ、幸せは、とつくに逃げ出したんだろうな、と思いつながら。

駅を出た時、街は既にオレンジに染まっていた。

道行く人の影は長く、皆帰路を急ぐ。夕方独特の喧騒に包まれている。

その中に、ポツンと取り残される様に二人はいた。

「えーと、この街でいいんだよね……」

「間違っではないと思う。ホラ、芸術の都・セリアシティってあるし……」

戸惑うように確認しあう二人。どうやら、間違っではないよう

だ。

しかし二人は、

「あー、でっかいなあ……」

「今日中に『フォウンテン』っていう宿にたどり着けないと思うんだけど……」

初めて見る大きな街に、ただただ圧倒されていた。

しかしそれは仕方がない。二人が住んでいるのは、ドが付くほどの田舎。

先代ルグレ家当主は、国の何処へでも行きやすいよう屋敷を国のど真ん中に構えたまでは良かった。

しかし、如何せんそこは山に囲まれた田舎だったのだ。

そして現在。国の南東に位置するセリアスシティは、別の修復士が受け持っている。しかし、その修復士は今、別の地方へと赴いているらしい。

そこで、急遽ルグレ家に白羽の矢が立ったのだった。

草木を遊び相手に育った二人にとって、初めての都会。大きな建物、数々の店、レンガの広い歩道、そして人・人・人。

言葉を無くした二人に、フェルクが言った。

「そうか？そんなに大きいか？俺が育った魔界の都市のほうは、これより大きかったぞ」

「えっ、これより大きな街があるの？」

「嘘だろ。こんな悪魔の言うことなんか信じるな」

「魔族だ」

またしても始まった、辺り構わずの言い争い。

「おい、お前らこんなことしている場合か？今日中に着かなきゃならないんだろ」

「ああ、そうだった」

嫌な事を思い出したように言うカイト。

「とりあえず、そこら辺の人に聞いてみる？」

しつかりとした口調で尋ねるセシ。

「それがいいんじゃないか？」

フェルクはそう言った。

かくして、田舎っ子二人と、自称都会育ちの魔族の、宿探しの旅（？）が始まった。

## 第二章：初めての都会（後書き）

ああ、中途半端で終わった（笑）

今書いている短編が終われば、こっちももっと沢山書きます。

出来れば、感想をお寄せ下さい。

### 第三章：広場へ

それから、かなりの時間が過ぎて、三人は、宿屋にいた。

「あー、疲れた」

二つあるベッドの、窓際の方にダイブするカイト。  
もう、すっかり夜も更けている。

「都会つてさ、何でこう物で溢れてんだろ」  
眠たいのか、欠伸をしながらセレが言う。

「だよなあ。建物に囲まれてると、落ち着かないし」  
うんざりした口調で話すカイト。そして、ここへ来た時の事を思い出していた。

時を遡る事約五時間前。二人（＋）は、すっかり迷っていた。

「ねえ、ほらアッチ」

「うお、何アレ？」

「食べれると思う？」

「死んでも知らないぞ。つてかあそこの、欲しいー」

「あつ本当」

しかし、まるで緊張感も危機感も無い二人。

「……オイ、そんな事してる暇あるのか」

そんな二人に、見かねたフェルクが、呆れ顔で言う。彼は、保護者を自認していた。

「あつ、そうだったね」

「オイ、そんな大事な事は早く言え」

やはり緊張感の無い二人。

フェルクは、もう何も言うまい、と決めた。

それから約一時間。

「ハアハア、多分、ここだと思う。……『フォウンテン』……」

「フウ……やつと着いたの……？」

「やったー、と力無く喜ぶ二人。ようやく探していた宿が見つかったらしい。」

「最初から、キチンと探せばすぐ見つかったんじゃないか？」

やはり呆れた調子のフェルク。

カイトは、そんなフェルクを睨み付けた。

「何だよ、こんな所初めてなんだからしょうがないだろ」

田舎育ちの二人にとって、都会とは見るもの・聞くもの全てが珍しい。そして疲れる。

最初の方こそはしゃぎ回っていた二人だが、すでに飽きて、もうクタクタだったのだ。

そして今に至る。

「明日は仕事だろ？もう寝ろ」

フェルクが言った。

「確かに眠い……お休み」

欠伸をしながらセレが言う。連られてカイトも欠伸をした。

カイトは窓際のベッドへ。セレはドア側の方に入り込む。ほどなくして、規則正しい寝息が聞こえ始める。

フェルクは、そんな二人を一晩中見ていた。いつもより少し優しく、少し穏やかな瞳で、ずっと見つめていた。

翌朝。

「……というワケで、つまりこの事が世界規模の……経済効果が、……だからなんたらかんたら……」

セレとカイトとフェルクは、市長宅の応接室にいた。

床には、高級そうなフカフカした絨毯が敷き詰められ、大きな暖炉の傍には、鎧や剣などのコレクションが並ぶ。はつきり言って、趣味が悪い。



セレは、目の前で既に三十分も語り続けるクライアントを観察した。

暑いのか、ジャケットは着ていない。シャツにピンク色のネクタイを絞め、出っ張った腹部のため、ズボンがずり落ちないようサスペンダーで留めていた。

視線を上げると、眼鏡を掛けた少し白髪混じりの頭が目に入る。生え際が後退し、額を脂汗が光る。

隣で、同じく退屈そうにしているカイトも、いつかはこうなるのだろうか？

その想像に恐ろしくなったセレは、チラリと見えた映像を忘れる事にした。

カイトの先に見えるのは、動物の頭部の剥製。生気を感じらんないその目にはめ込まれたガラス玉だけが、唯一光を放っていた。セレは、視線をずらした。自宅にも掛かっているが、あの剥製は昔から嫌いだ。特に、あの目が怖かった。

「……と、いう事は我が……それがつまり……芸術の都という点に於いて……」

セレは、この男のどこが芸術だろう、と胸中で呟く。

フェルクは、我関せずとばかりに、市長の隣で体を丸めて眠っている。後で叩いてやろう、と心に決めた。

ふと横を見ると、カイトと視線がぶつかる。

（オイ、あの親父。まだ終わんないのかな？）

カイトが目で話し掛けてきた。同じように視線で返す。

（カイト、聞いてみたら？）

（えー、オレ？嫌だよ。話、全然聞いて無いし。セレが聞けよ）  
（何やってたの？もう、しょうがないなあ）

セレは、一度グツと力を込めた後、勇気を出して尋ねた。

「あの……依頼内容とはつまり、西区のサン・リトロ広場に出現した歪みの修復、という事ですね？」

そこまで一心不乱に語っていた男は、口を出された事に、眼鏡を

掻き揚げながら、不機嫌そうに答えた。

「まあ、そういう事ですね。というわけなので……」

「では、今から参ろうと思います」

再び始まりそんな熱弁を遮って、セレはきっぱり言い、立ち上がった。カイトも、

「邪魔しました」

と、立ち上がる。

市長がカイトの方を向いた際に、セレはフェルクを一発殴った。

「痛っ。……何だ何だ？」

「も、もう行かれますか？」

背後からそんな声が聞こえたが、二人はやりわりと無視し、颯爽と部屋を出た。

市長宅の豪華な門を出た二人は、凝り固まった筋肉を伸ばした。

あまりに長時間聞いていたため、体中が軋んでいた。

「あー、それにしてもあの話、長かった」

「あつ、どれ位長かったか、時間測れば良かったなあ。勿体無え」

「おい、セレ。俺に対する謝罪は無いのか？」

「旦那様のお話は、いつも長いですからね。先程のは、短い方ですよ」

「ふーん、そうなんだ。あのオッサン、話のネタが尽きないのか？」

「……って、お前誰だよ?!」

いつの間にか、会話に加わっていた青年。彼に気付いたカイトは、驚いた声を上げた。

「申し遅れました。私は案内人の、エリック・スバローです。エリックとお呼び下さい。旦那様から、お二人を広場まで連れて行くよと言われました」

エリックと名乗った青年は、自己紹介しながら、にっこり微笑む。セレとカイトは、顔を見合わせた。

「あつ、初めまして。セレーノ・ルグレです。セレでいいです」

「どうも。カイトです」

互いに名乗る。カイトは、本名を言わなかった。

「エリックさん。広場までは遠いですか？」

「いや、歩いて行ける距離ですよ。それでは、私に着いて来て下さい」

そして三人は、歩きだした。

### 第三章：広場へ（後書き）

お久しぶりです。こんにちは。

えー、前回から大分時間が経ってしまいました。

それというのも、寮に入ったからなんです。自由時間が寝る前の  
一時間だなんて……orz

愛読している方がおられるかは知りませんが、これからもよろしく  
お願いします。

## 第四章：修復士の仕事

サン・リトロ広場を目指して歩く三人。エリックが、観光がてらに色々と説明する。

「あそこに見える教会は、魔界の宮殿を模して建築された、といわれております。旧暦九五二年に起きた戦争でも、あそこは炎に包まれることは無かったそうです」  
や、

「あちらのホテルは、セリアスシティー有名な『フォウンテン』です。お二人共、昨晚はあそこにお泊まりになったと聞いております。今は有りませんが、その名の通り、それはそれは見事な噴水が有りました」

など、逐一と説明しながら歩く。

カイトは、そんなエリックにすっかり懐き、  
「へえ、じゃああそこは、そんなに古いんだ」  
や、

「わっすげえ。あの銅像は？右から三番目の、変な帽子を被った変なオッサン」

など、色々な質問をしていた。

セレは、そんな二人の少し後を歩いていた。その肩に乗ったフェルクと、ひそひそと会話をしている。

「魔界の気配がする。そろそろかな？」

「ああ。油断はするな。『咎』はいないか？」

「それは大丈夫。いたら分かるから」

セレの顔つきは、既に修復士のそれだった。

三人はやがて、レンガ敷きの、大きな広場へ辿り着く。妙な気に満ちていた。

「ここが、サン・リトロ広場です。毎日、沢山の人が利用しており

ます」

今は昼時という事もあり、それなりに人がいる。

そして、人だかりが出来ている所が、一カ所あった。そこから、魔界の気が漏れている。セレとカイトは、顔を見合わせながら頷いた。

「エリックさんは、もう少し離れていて下さい。周りの人にも伝えて下さい」

「行くぞ、セレ」

そう言い残して、二人は走り去る。残されたエリックは、セレに言われた事を、早くも実践し始めた。

「今回は、どっちがやる？この歪みは、それ程大きく無いけど」

「うーん、そうだなあ。頼むわ。俺は後ろで見とく」

手を合わせながら頼むカイト。気になる事をあつたので、セレも承諾した。

「それが賢明な判断だろうな。お前が修復するより、セレの方が確実だ」

「オイ、お前は黙ってる。自分じゃ修復出来ないくせに」

そんな会話をしながら、走る二人。

人だかりまでやって来た。

「すいませーん、下がって下さい。修復士です」

セレが、人を掻き分けながら叫ぶ。そして、胸元から、何かを引っ張り出した。

カイトもそれに続く。

「はい、どいたどいた。危ないですよ？あっちまで下がって下さい」

そしてやはり、胸元から何かを引っ張り出した。

野次馬たちは最初、

「あ？何だ何だ？」

「修復士だよ」

「こんな子供がか？嘘だろ」

と言っていたが、二人が掲げている物を見て、

「なんだ。本物か」

と、ゾロゾロ動き出した。

二人が引つ張り出したのは鎖で、その先に小さな金色のメダルがぶら下がっている。

これは、修復士免許所有者の証である。表には隣り合わせの人間界と魔界の様子が、裏には二人の生家であるルグレ家の家紋と二人の名前が、それぞれ彫ってあった。

これを出せば、どんな場所でも、修復士だという身分証明になるのだ。

野次馬たちが去った後のその場所には、“立ち入り禁止”と書かれた黄色いテープが張り巡らされているのが見える。更に、セレやカイトみたいな視る目のある者には、歪んだ空間が見えるだろう。「セレ、頼んだぞ。俺達は後ろにいるからな。何かあったら、すぐに呼べ。あと、念の為に結界を張っておく」

セレの肩からヒラリ、と飛び降りながらフェルクが言った。

「うん、分かった」

セレの状態を確認した後、カイトと共に下がる。

セレはそれを見届けてから、歪みに向き直る。一度深呼吸して落ち着き、手をかざす。目を瞑って、静かに言葉を紡ぎ出した。

フェルクが張った結界の中で、カイト達は静かに見守っていた。セレの口から紡がれる数々の単語は、一つ一つ意味のある言葉へと構成され、歪みを捉えていく。一つの問いは、一つの答え 空間の修復という答えへと結び付く。

カイトは、目と耳をフル稼働させ、姉の姿を凝視した。

空間の修復においては、セレの方が上であった。カイトは、いつ

かはルグレ家を継ぐ身である。その極意をその極意を学ばなければならぬという事を理解していた。

一方、修復を続けるセレは、異変を感じていた。先程気になった事が、益々大きくなっていく。

その龍眼が捉えた事実は、『咎』がいる だった。

セレは、詠唱の速度を早める。間違い無い。この歪みを通った『咎』が、魔界から再びここへと向かっている。

こちらが早いか、あっちが早いか。

後ろの二人に呼びかける事は出来ない。詠唱を止めれば、また最初からやり直さなければならぬからだ。

セレは、二人がこの事に気付いてくれるよう祈った。

ハッと顔を上げるフェルク。

「オイ、気付いたか？」

カイトを向きながら言う。

「『咎』だ」

「えっ…… 本当だ」

カイトにも、ようやくその存在を捉える事が出来た。

「修復には、もう少し時間が掛かる。どうすんだ？」

カイトが問い掛けると、フェルクは走り出しながら言う。

「何をボサツとしている！ 走れ！」

その言葉にムツとしたカイトだったが、素直に走る。その言葉は正しいからだ。

フェルクの銀色の毛並みは、すぐに小さくなっていった。

最後の最後まで詠唱しようとしたセレの目に、空間を貫く鋭い爪が見えた。そしてそれは、修復仕立ての空間を引き裂く。

『咎』が現れた。遠巻きに見ていた見物人から、悲鳴が上がる。



元は悪魔だったその『咎』は、黒髪や金色の瞳など、各所にその名残があった。しかし、大きな爪と牙、変形した体や体中から出た角など、もはや別物である。

その悲鳴に『咎』が、セレの存在を見つけた。そして爪を振り上げる。

「セレっ！」

ドンツ、シュツ、ザザツ！

間一髪、フェルクがセレを突き飛ばした。一瞬前までセレの頭があった場所を、『咎』の爪が突き抜ける。

標的を逸れた爪は、セレの左腕をかすめた。そこに二本の紅い筋が走る。

「大丈夫か、セレ！？」

セレを庇うように『咎』に向き合ったまま、フェルクが言う。

「ん……うん、なんとか……」

「下がってる」

そこへ、遅れてカイトがやって来た。

「セレ、怪我は？……よし、後はまかせとけ！」

そう言って、『咎』に対峙する。『咎』の方も、ターゲットをカイトへと変えた。

それを見て、加勢しようかと一瞬迷うフェルク。

しかしカイトならば、一人でも『咎』と渡り合えるだろう。そう判断し、フェルクはセレの傍に駆け寄った。そして、魔法で出血を止める。

「ありがとう……」

「ああ。カイトのが終わったらどうする？修復出来るか？」

「大丈夫。任せて」

一方『咎』と向き合っているカイト。彼は、じりじりと間合いを

取りながら、隙を伺っていた。

セレにはフェルクが付いているので、大丈夫だろう。それに、悪魔の半分の魔力しか持たない『咎』は、カイトの敵ではない。

『咎』が、腕を振りかぶった。素早くそれを見極め、防御壁を築く。振り下ろした『咎』の爪は、防御壁に阻まれた。

「へっ、そんなんじゃ効かねえよ！」

叫びながら走り、防御壁を解くカイト。同時に、魔法で炎を創り出した。

「お前も、今度からは考えて人間界に来いよな。“今度”は、もう無いけど」

そして、炎を『咎』へと叩き付けた。

「これでトドメっ！」

カイトの創り出した炎は、『咎』を飲み込む。

「ギヤアアアアア！」

という悲鳴と、勢い良く炎がはぜる音。見ている見物人からも、感嘆の声と、興奮したような囁きが聞こえる。

「へへっ。楽勝！」

カイトは、につこりと笑った。

少し前、カイトの炎が『咎』を飲み込みまんとしている時。

「……！」

セレは一人、心の中で、声にならない悲鳴を上げていた。そして目を背ける。『咎』は、消えていた。カイトが誇らしげに、微笑んでいる。

それを見て、胸が痛んだ。

頭では分かっている。自分は人間。『咎』は敵で、倒すべき者。それでも、考えらずにはいられない。なぜあの悪魔は、人間界へ来たのだろう。『咎』になる事は、百も承知だったろうに。

セレは思う。目の前にいる、銀色の小さな悪魔は、何を思ったのか。自分の元・同胞に対して、何を感じたのだろうか。その顔は

見えず、表情は伺えなかった。

消えていった『咎』に、祈りを捧げた後、セレは立ち上がる。  
再び開いた空間の修復に取り掛かった。

#### 第四章：修復士の仕事（後書き）

こんにちは。神城です。

昨日は午後に時間が出来たので、執筆する事が出来ました。  
前回は、時間が空きすぎてしまったので、そのお詫びを込めてで  
す。（そのお陰で、文調を忘れました……）

こんな作者ですが、これからもよろしく願います。

## 第五章：近づく影

ガタンゴトンと、汽車が走る。時折煙を吐き出しながら、東へ東へと進む。

最後尾に近いコンパートメントの中に、セレとカイトとフェルクはいた。地平線へと沈み行く太陽によって、室内はオレンジ色に染まっている。

誰もが無言だった。詳しくいえば、セレは膝の上のフェルクを撫で、フェルクは撫でられながら、時折その体がピクリと動く。カイトはシートを丸々一つ使って寝ていた。

尚も東へと進む汽車。  
そして日は暮れる。

「お前らなあ。俺が起こさなかったら、乗り過ごしていただろ」

すっかり夜も更けた山間の無人駅。そこには、頭を垂れた子供が二人と、常人には見えない悪魔がいた。

「はい、すいません」

「次からは気を付けます」

二人の子供　セレとカイトが謝る。

「分かればいいんだ」

フェルクは、飛び上がってセレの肩に乗った。

「帰ろっか」

セレが弟を振り向きながら言う。カイトは疲れた一、とだけ言った。

「ふう、やっと着いた」

大きな屋敷の豪華な玄関を前に、カイトが言う。勿論この屋敷はルグレ家だ。

「結構遅くなっちゃったね」

セレの言う通り、既に夜も遅く、夜空には三日月が架かっている。  
「オレは早く寝たい。疲れたよ」

カイトはそう言いながら、玄関を開けた。

「ただいまー」

「帰りました」

玄関ホールに足を踏み入れる二人。すぐに執事のハワードが出迎えた。

「お帰りなさいませ。セレーノ様、カイト様。お食事はどうされま  
すか？」

セレは初老の男性を向きやると、テキパキと応える。カイトは眠  
かったので、そのやり取りをぼーっと眺めていた。

「夕飯はもう済ませたから。それより、父に報告しなきゃ」

「かしこまりました。ミランダにそう伝えておきます。旦那様は書  
斎ですよ」

「ありがとうございます。カイト、行くよ」

眠りかけていた弟の腕を引っ張るセレと、ハッと我に帰るカイト。  
ハワードは、二人に微笑んだ。

「今書斎へ行かれると、お二人共お喜びられますよ」

その言葉に、すぐさまカイトが反応した。

「え、何かあんの？」

「それは、ご自分の目でご確認下さい」

「ケチー。教えてよ」

子供のように膨れるカイト。

「カイトー、早く行くよー」

しかしセレに従って、階段を登りはじめた。

ルグレ家当主の書斎は三階にある。そこまでの道すがら、三人は、  
ハワードが述べた事について、色々と予想していた。

「何だろ。小遣いとか貰えるのかな」

そう言ってカイトは、セレの方を振り向く。

「違うんじゃない？書斎から、三つの魔力反応がある。多分その一つはお父様のだと思うけど。フェルクはどう思う？」

セレは肩の上のフェルクを向きやった。フェルクは、ああと言って話し出す。

「俺にも微かに感じられる。やっぱり一つは、お前らの親父さんだろ」

「後の二つは魔道具？」

カイトは魔力を感知する、という点では二人に劣る。彼には、三つの魔力反応が感じられなかったようだ。

「ごめん、そこまでは分かんない」

「龍眼でも分かんねえ事ってあるんだ」

カイトは馬鹿にした口調で言う。一人だけ仲間外れで悔しかったのだ。

「仕様がないでしょ。龍って言ったって、所詮は人なんだし。それに、この屋敷には、色々な結界が施してあるんだから」

そうこうしている内に、書斎の前に辿り着いた。セレがその扉をノックする。

「お父様、セレとカイトが報告に参りました」  
すぐに応答される。

「入りなさい」

「失礼します」

その声に、扉を開けるセレ。カイトも後に続いた。  
するとそこに見えたのは

「兄さん！」

「おっ、兄貴じゃん。義姉さんもいるし」

とある名門修復士の家に婿養子に行った長兄・エミリオとその妻・

ティーナだった。

「やあ、二人共。久しぶりだね」

「お邪魔してるわよ。セレもカイトも、しばらく見ない内に大きくなっただわね」

少々線の細いエミリオと、お嬢様らしさを感じさせないティーナ。会うのは実に一年ぶりであった。

「それより二人共、まずは報告をしなさい」

兄弟達の父親であるルグレ家当主・ダニエルが口を開く。

「あつ、はい。やはりセリウスシテイには、歪みが生じていました。これは私が修復をしました。あと、歪みから『咎』が一体現れました」

すぐさまセレが応える。

「『咎』だと？して、被害は」

ダニエルの問いに、今度はカイトが引き継いだ。

「それは問題ありません。俺が倒したんだ」

ダニエルはカイトの言葉に何かを考える様子だったが、やがてこう言った。

「そうか、二人共ご苦労だったな。今日はもう遅い。早く休みなさい」

やっと退出を許されて、カイトはホッとした。もう限界だったのだ。

「失礼しました」

扉が閉まったのを確認して、エミリオは父の方へと向き直る。

「やはり父上……。各地で歪みが、多発していますね」

「ああ。それに『咎』の動きも活発化している」

「お義父様、あの二人には、いつ告げるのですか？」

ティーナの問いに、ダニエルは逡巡した後、応える。

「もう少し様子を見てみよう。満月までは、今しばらく時間がある」



「それにしても、久しぶりだよな。兄貴達に会った」

カイトが嬉しそうに言う。たとえ八歳も年が離れていても、兄は兄なのだ。

「でも変じゃない？何でこんな時期に里帰りなんてするんだろ」

セレは、腕を組んで考え始める。

「何でもいいじゃん。俺、明日は兄貴と遊ばっと。じゃ、お休み」

カイトは自室の扉を開け、すぐにその中へ消えた。余程眠たかったのだろう。

「そうだな」

フェルクはセレの肩から飛び降りると、器用に窓枠へと着地した。「どうしたの？」

セレもフェルクにつられて、窓際まで寄る。フェルクは、空を見上げながら言った。

「そろそろ満月だ。魔界の動きも、活発になっているだろう。理由はそれに間違いない」

空には紅く、大きな三日月が架かっていた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4420a/>

---

Holonic Concerto

2010年12月5日11時18分発行